

つなぐ

つなぐ

子供を守るための防犯教育プログラム



京都府警察本部

子供を守るための防犯教育プログラム

京都府警察本部

子供たちの確かな安全を未来につなぐ
質の高い防犯教育をすべての子供たちに

つなぐ

子供を守るための防犯教育プログラム

子供たちの確かな安全を未来につなぐ
質の高い防犯教育をすべての子供たちに



京都府警察本部 生活安全部少年課

防犯教育プログラム策定にあたって

「令和」という元号には、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められており、「悠久の歴史と薫り高き文化、四季折々の美しい自然、こうした日本の国柄をしっかりと次の時代へと引き継いでいく。厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたい。」との願いをこめて決定されました。

「令和」が、そのような時代であるために、私達は、これまで以上に良好な治安の維持に全力を挙げるとともに、子供たちが安全で安心して成長することができる新しい時代にふさわしい社会を構築していく必要があります。治安指標の一つである刑法犯認知件数は減少を続けていますが、小学生等を対象とした犯罪や声掛け事案などは依然として多発しています。また、全国では、これまでの常識を上回る方法で子供が命を奪われたり、連れ去られるといった凶悪事件が発生し、府内でも同種事案への発展を懸念させられるような態様の声掛け事案も発生しています。子供たちの命と安全を守り切るためには、これまでのような警察やボランティアの方々に

よる安全・安心を守る活動とともに、子供たち自身が防犯力を身につけることも必要となってきました。

このプログラムは、これまで現場の警察官やスクールサポーターが個々の力量に頼っていた防犯教育を根本的に見直し、防犯教育を行う指導者側の基準を共有することにより、すべての子供たちがより質の高いレベルの防犯教育を等しく受けられることを目的に作成しています。子供たちは就学に伴い、保護者から離れて行動する機会が増え、行動範囲も少しずつ広くなり、子供だけで行動する機会も増えていきます。そのため、これまでの大人が一方的に子供を見守るという考え方だけではなく、子供たちがいざという時には、可能な範囲で自分自身を守る力を身につけることができるよう、発達段階に応じた教育の重要性に目を向けています。

子供たちが「生きる力」を身につけ、それぞれが今後直面する様々な課題に柔軟に対応し、将来、社会人として自立した時には、地域の方々と協力して地域の安全・安心を担うような若者となってくれることを願って、学校や地域のボランティアの方々と協働しながら子供たちを育んでいくことを望みます。

令和3年3月
京都府警察本部生活安全部
少年課長 警視

藤原 哲也
(現京都府木津警察署長)



「つなぐ」の発刊によせて

子どもたちへの安全教育では、子どもたち自身による自助努力の理解と実践能力の育成は必須要件となりますが、その教育効果を高めるためには、安全は自分一人の努力だけで作られるものではなく、友達や学校の教職員、保護者、スクールガードや警察、消防など地域関係機関の人々など、子どもたちを取り巻く多くの人々の共感と協働によって創りだされ確立されていくということを子どもたちに理解させる必要があります。

このような共感と協働による信頼の育成があつてこそ、子どもたちに地域への安心感が育まれ、さらに長

期的な教育効果として、今、目の前にいる子どもたちが10年後には大人となり、20年後には子どもを持つ保護者となった時に、次の世代の子どもたちの安全推進の実践に取り組む地域で有為な人材へと成長していってくれることが期待されるところです。

今回まとめられた防犯教育プログラムが、これからの京都府下の学校園と警察職員による学校における安全教育活動に関わる連携と協働において活用されることを通じて、安全で安心な学校環境の構築と、京都の子どもたちの健やかな成長が全府下で広く支援・展開されていくことを期待しております。

大阪教育大学
藤田 大輔



学校安全において事件や事故に関する授業は、教師ばかりでなく学校から依頼を受けた警察職員やスクールサポーターが担当することもあります。そのこと自体はもちろん大変意義があるのですが、残念ながらこれまで、どちらも個々の力量を頼りにして行われてきた傾向があると言えるでしょう。児童への犯罪防止に関する教育には、犯罪に関する経験や専門的知見のほかに、子ども理解や指導力といった専門性も必要であり、どちらも欠くことはできません。子どもの安全を強く願う熱き思いを持つ人たちの、いわば「警察力」と「教師力」、両者の専門性をつなぐことにより、より質の高い防犯教育が可能になります。加えて、これまでは指導内容や方法も個々の力量頼みでした。しかし小学生の各段階で何をどこまで教えておくべきなのか、児童の防犯力などを根拠とし指導者が基準を共有すれば、児童にとって質の高い学び

の機会が増えることとなります。これまで、私は学校安全教育に関する研究、およびその実践に関わってきた経験から、これらの課題を提起し取り組んできました。少しずつ、この課題への取り組みが進んでいます。

この度は、この課題の重要性や必要性をご理解、共感していただき、京都府警察、京都府及び京都市教育委員会の先生方など、関係者の皆様と共に、「京都府県警察本部の警察職員のための防犯教育プログラム『つなぐ』」をまとめることになりました。このプログラムが活用されることにより、犯罪被害防止のための学校安全教育が量的、質的に高まり、京都府の子どもたちの安全安心がより確かなものになることに期待しております。これら大人の協働による学校安全教育が、子どもたちとの信頼関係を育み、彼ら自身がまた将来の安全安心の担い手へと成長してくれれば、望外の喜びです。

日本こどもの安全教育総合研究所

宮田 美恵子



目次

将来構想

- ・ 5年後に実現したい京都府の子供安全の将来像
- ・ 方策
- ・ 策定の趣旨

防犯教育プログラム

01 子供に対する発達段階に応じた体験型防犯教育 p07-10

- (1) 防犯教育の目的、目標、内容 p07
- (2) 防犯教育の概要 p08
- (3) 子供の特性と行動 p09
- (4) 学校教育との整合性 p10

02 防犯教室指導内容 p11-14

- (1) 防犯教室の基本的な考え p11
- (2) 子供と接するときの基本ポイント p12
- (3) 防犯教室の目安などについて p14

03 具体的な防犯教室の内容 p14-40

- (1) 防犯教室実施要領について p14
- (2) 低学年向けの内容 p16

パターン 01 危険予測：あなたを見守っている大人は味方、みんなで安全をつくっている。

パターン 02 危険予測：話すときの人との距離を考える。

パターン 03 危険回避・意思表示：出かけるときに気をつけることを知る。ひとりになったらどうするか考える。

パターン 04 危険回避・相談・報告：防犯標語「いかのおすし」を知り防犯の基本を楽しく学ぶ。

パターン 05 危険回避・意思表示：声を掛けられたらどうするかを考える。

パターン 06 危険回避：家に帰った後や夏休みなど休み中の行動を考える。

(3) 中学年向けの内容 p23

パターン 01 危険予測：人について考える。支え合うまち

パターン 02 危険予測：遊びに行くときの約束や気をつけることを考える。

パターン 03 危険回避・意思表示：車に乗っている人から声を掛けられたときの行動を考える。

パターン 04 危険回避・運動場や教室に先生以外の大人が来て子供に声を掛けたときの対応を考える。

パターン 05 危険回避：周囲の大人に知らせるため、大声を出す練習をしてみよう。

パターン 06 危険回避：防犯ブザーの使い方を学ぶ。

(4) 高学年向けの内容 p30

パターン 01 危険回避：社会とのつながりを実感し、防犯に対する社会参加行動を考える。

パターン 02 危険予測・危険回避：通学路などの安全について考える。

パターン 03 危険予測・危険回避：歩く時の注意、後ろにも気をつける。

パターン 04 危険予測・危険回避：エレベーターに乗るときの行動を考える。

パターン 05 危険回避・相談・報告：気になることがあれば、信頼できる大人に相談する。

パターン 06 危険回避：習いごとなどの帰りで遅い時間にひとりで帰ることになったときの行動を考える。

(5) 小学校の特別支援学級や特別支援学校に向けての工夫 p37

(6) 家庭・地域との連携 p39

(7) 学校と連携した振り返りの仕方・検証 p39

コラム：「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」が策定されました p41

コラム：学校で実施される地域安全マップ作成について知っておこう p43

指導略案 低学年パターン p44

指導略案 中学年パターン p45

指導略案 高学年パターン p46

※指導略案とは、学校の授業の指導計画のこと

付録

防犯教育プログラムパターン別パワーポイント資料早見表

将来構想

5年後に実現したい京都府の子供安全の将来像

犯罪を生じさせない安全・安心な社会

すべての子供に包摂的かつ公正で質の高い持続可能な防犯教育を提供し、将来地域の一人として地域の安全のために活動する次代の京都を支える人材を育成することにつながります。

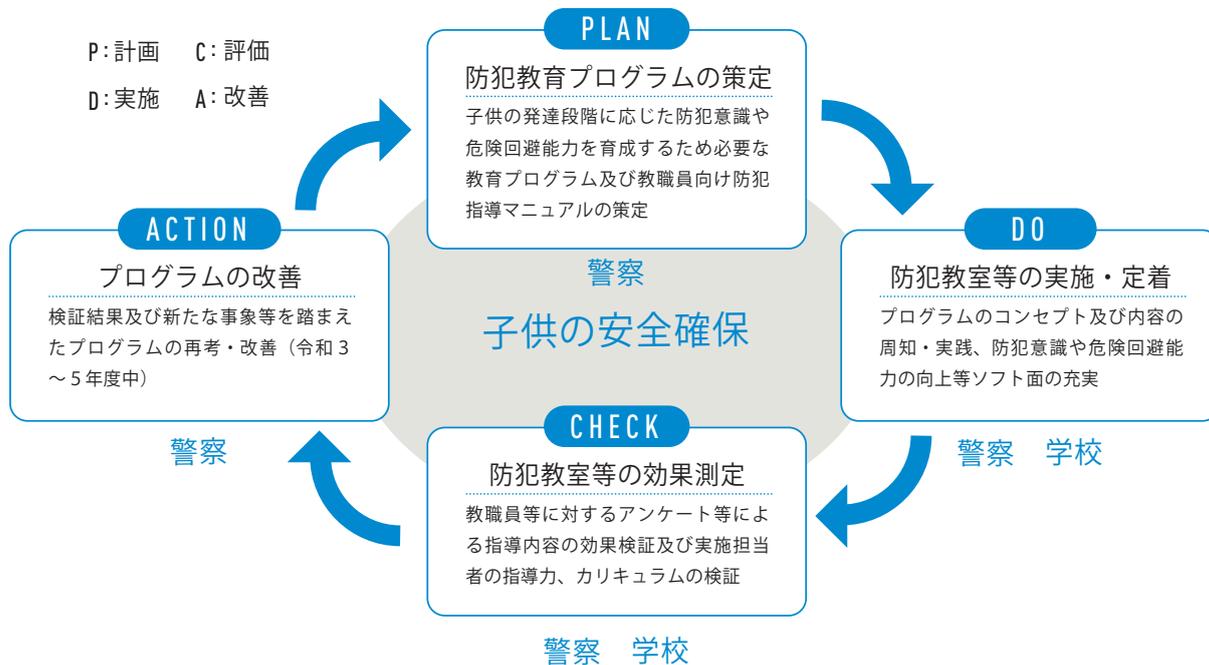
方策

京都府総合計画「災害・犯罪等からの安心・安全」きょうとチャレンジに基づき犯罪等から府民（子供）の命を守るため、実効性のある危機管理・安心安全体制を構築します。

策定の趣旨

防犯教育の受け手である子供たちに均一な防犯教室を提供するためのプログラムを活用し子供自身に考えさせ、体験させることにより、いざという時の危険予測、危険回避及び行動選択能力を全ての子供に可能な限り等しく身につけさせ、子供が自分の力で、自分の安全を確かなものに行えるようにすることを目指します。

警察職員による防犯教育のPDCAサイクル



PART 01 / 子供に対する発達段階に応じた体験型防犯教育



(1) 防犯教育の目的、目標、内容

目的

- 日常生活における犯罪被害の現状、原因及び防止方法について理解を深めます。
- 現在及び将来に直面するおそれのある危険に対して、的確な思考・判断に基づく適切な意思決定や行動選択ができるようにします。

目標

このプログラムでは、次のような子供たちの育成を目指します。

- 日常生活の中に潜む様々な危険を予測・回避し、安全な行動をとることができる
- 自他を尊重し、安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、学校、家庭及び地域社会の安全活動に進んで参加し、貢献できる
- 「気づき、考え、判断し、行動する」
- 将来的に、社会人として自立し、地域社会の一員として地域の人々と協力し、活躍が期待できる

内容

学校などにおける子供の安全・安心にかかわる問題は、子供同士の暴力やいじめ、器物損壊などから、学校部外者による犯罪まで多岐に渡りますが、ここでは、学校部外者による学校内外での犯罪防止に係る内容に限定して取り上げます。これらの内容を、子供の発達段階、特性などを考慮して、学校等との意向に沿って実施します。

(2) 防犯教育の概要

子供自身に考えさせ、体験させることにより、いざという時の危険回避能力を身につけさせる

子供が自分の力で自分の安全を確かなものにできるように

目的

- 日常生活における犯罪被害の現状、原因及び防止方法に対する深化
- 現在及び将来に直面する防犯上の課題に対して、的確な思考・判断に基づく適切な意思決定や行動選択能力の育成

目標

- 日常生活の中に潜む様々な危険に対する予測・回避と安全行動の理解
- 自他の尊重、安全で安心な社会づくりの重要性の認識、学校、家庭及び地域社会の安全活動への貢献
- 「気づき、考え、判断し、行動する」の実践
- 将来的に、社会人として自立し、地域社会の一員として地域の人々と協力する人材の育成

内容

- 低学年向け、中学年向け、高学年向けの内容を構成
- 「防犯」を4つの視点（①危険予測 ②危険回避 ③意思表示 ④相談・報告）で捉えた子供自身の危険回避能力習得を目指した体験型カリキュラム
- 自分の住む町の安全の理解と地域の方々と顔の見える関係の構築

京都府警察は、教育委員会、学校等関係機関と連携しPDCAサイクルに基づいて、防犯教育を推進し続け、弛まぬ進化を目指します。

学校だけで活動を完結するのではなく、家庭や地域に対して子供の防犯について発信して、府民の防犯意識の高揚を図ります。防犯教育を通じて社会参加活動のできる子供の育成を図るとともに、地域社会全体で犯罪のない安全・安心なまちづくりを支援します。



基礎知識

(3) 子供の特性と行動

小学校低学年(1・2年生)

特性

- 自分で身の回りのことができ始め、基本的な生活習慣が身につくようになります。
- 対人関係が保てるようになり、他者への思いやりを持つことができるようになります。
- 集中力は長続きしません。
- 善悪の判断や規範意識の基礎ができはじめます。

行動

- 就学と同時に登下校が始まり、子供同士で公園で遊ぶなど、親から離れて行動する機会が増えるようになります。
- 集団の中で協調性を持って生活しつつ、手をあげて発言するなどルールを守りながら自己主張もできるようになります。
- 集団の中で役割を決めて遊ぶことができるようになります。



「怖いから気をつけよう。」という否定的な表現を用いず、「気をつけていれば大丈夫。」という肯定的な表現で指導します。

小学校中学年(3・4年生)

特性

- 身辺自立ができるようになります。
- 善悪の判断や規範意識の基礎ができはじめます。
- 他者に共感し、我慢や分け合い、遊具の譲り合いなどができるようになります。

行動

- 集団の中で役割を決めて遊ぶことができるようになります。
- 友達の気持ちや考えを理解し、してはいけないことがわかり自制しようとするができるようになります。
- 留守番をまかされる子も増えます。

小学校高学年(5・6年生)

特性

- 認識力、分析力、判断力等が身につく、自意識も強くなります。
- 自分のことが客観的にとらえられるようになりますが、発達個人差も顕著になります。
- 他者意識が芽生え、他者との関係の中で自分のことを考えたり、他者への接し方を考えたりできるようになります。
- 他者との関係の中で善悪の判断がつくようになります。
- 自己肯定感を持ち始める時期ですが、反面発達個人差も顕著になることから、自己に対する肯定的な意識を持たず、自尊感情の低下により発生する劣等感の克服が課題となる時期でもあります。

行動

- 集団の中で自分の役割を意識し、自分の責任を果たすようにできることが期待できます。
- 仲間意識が強くなり、特定の友人との深い関係を築くことができるようになります。
- 失敗から学ぶことができる。社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さを理解することができるようになります。

あまり子供扱いせず「一緒に考える」というスタンスで指導します。子供自身の「考え、判断する力」を引き出します。



(4) 学校教育との整合性

防犯教室の実施にあたっては子供に無用な混乱を与えないよう学校教育との齟齬がないことが重要です。

事前に学校の先生方と「既に学校で指導した事項と矛盾が生じないか。学校の指導方針と合致しているか。」など十分打合せをして防犯教室等の内容を検討します。

PART 02 / 防犯教室指導内容



(1) 防犯教室の基本的な考え

01 気づき、行動できる力を育てる

犯罪を予防するために、子供たち自身が何に気をつけるのか気づき、考え、判断し、行動できる力を育みます。

02 「人」でなく、「行為」に注目する

子供に危害を及ぼす人は見た目ではわかりません。じろじろ見られる、つきまとわれるなど、自分にとって「嫌なこと」、「怖いこと」などの「不快な行為」を受けているかどうかで判断することを教えます。

03 「ひとり」にならないことを教える

子供が危険に遭遇しやすい状況のひとつに、「子供がひとりで下校している」、「ひとりきりで遊んでいる」など、子供が単独でいる状態が考えられます。ひとりきりにならない大切さを教えます。

04 挨拶をすることの大切さを伝える

お互いに声をかけ合うと顔見知りの関係になり、明るい雰囲気ができます。しっかりと挨拶をすることの大切さを教えます。合わせて子供たちには、地域には見守ってくれる、信頼できる大人がいることもしっかりと伝えます。

05 危険への対応を教える

危険から自分を守るために、危険から離れたり、危険を知らせる方法を教えます。

06 子供に配慮する

過去に被害に遭っている子供がいるかもしれないということを配慮して話をします。防犯教室では被害に遭った子供がいない前提で話をしてしまいがちですが、そのときは、被害とっていなかったけれど、防犯教室を受けることでそれが被害だったと気づきショックを受ける子供もいます。被害に遭った人（子供）が悪いのではなく、行為者が悪いということを伝えます。防犯教室の開始時に、「もし気分が悪くなれば保健室へ行ってもいいんだよ。」「不安なことがあれば、周りの先生にすぐに言ってくださいね。」などいたわりの言葉を掛けると、子供が安心して参加することができます。

(2) 子供と接するときの基本ポイント

01 はっきりとした声で

一本調子で話すことなく、メリハリをつけ、明瞭にはっきりとした声で話します。

02 言葉遣いに配慮する

ひとり親家庭、里親や養護施設など様々な境遇で育っている子供たちがいて、両親と暮らしていない子供たちがいることを念頭に置いて子供たちと接します。「お父さん、お母さん」の言葉は使わず、「保護者の方」、「おうちの方」など配慮した言葉遣いをします。

03 一緒に考え、共に学ぶ

基本的な姿勢として「教える」のではなく、「一緒に考え、共に学ぶ」気持ちで子供と向き合うよう心掛けます。指導者だけが話して終わるのではなく、子供自身に考えさせ、発言させ、体験させます。防犯教室で学んだことがその時間だけで終わってしまうのではなく、子供の思い・考えを変えられるような、また、思い・考えが変わったことにより子供の行動に変化が見られるように心がけてください。

04 発問を工夫し、子供が発言したくなる展開を心がける

子供たちの混乱を避けるため、1回に行う発問は1つにします。子供たちと目をあわせ、表情や反応を確かめながら、自由に考えを話してもらえそうな雰囲気を作り、発問します。具体的に指示し、全員ができたか確かめ、集中して聞くことのできる状態になるまで待ちます。

05 具体的に褒め、簡潔に注意する

褒めるときはタイミングを逃さず、どのような所が良かったのか具体的に褒めます。注意する時は、簡潔に、穏やかに対応します。

06 明るい雰囲気

明るい雰囲気ですと子供たちと接することを心掛けます。学習から逸れない範囲でユーモアを交え、安心して学習できる場を作ります。

07 同じ子供ばかり指名しない

発問に対し挙手を求めたら同じ子供ばかり挙手する場合がありますが、同じ子供にばかり指名することがないようにします。

08 決められた授業時間を厳守する

学校で決められた授業時間内で必ず終了するようにします。
話に夢中になると、時間オーバーすることがあります。気をつけましょう。

09 継続して、先生方が指導することを念頭に

警察職員が子供たちに防犯教室で話すのは防犯教室のその時間だけですが、子供たちには日々学校生活のあらゆる場面で繰り返し防犯指導をしていただくことになります。「先生がどれだけ子供を守るために愛情を持って努力されているか。」を子供たちに伝え、先生と子供たちが協力して子供たちの安全を作り上げることができるよう心掛けます。



学校と事前打合せで情報共有する内容について

- 授業内容（指導内容）
- 学校が子供たちを指導する際に気をつけている点（特性や家庭環境に配慮した子供の接し方など）
- 過去に事件や事故などに遭った子供がいるかどうか、いる場合は配慮すべき事項
- 地域の情勢に応じた指導内容の確認
通学距離が長いなど、地域によって発生事象が異なるため、地域や学校の状況を把握する。

(3) 防犯教室の目安などについて

01 実施対象学年について

小学校1年生から6年生まで

02 実施時間、場所

- 授業の1時限を利用して行う場合▶実施時間：40分間、実施場所：各教室、体育館等
- 「非行防止教室」の時間内で実施する場合▶実施時間：5分～15分、実施場所：各教室、体育館等

03 実施方法

防犯教室の実施対象学年や、実施時間、場所に応じて、後述する例示の中から必要な内容を選択するなど、学校の先生方と話してニーズに合わせて企画、実施します。

PART 03 / 具体的な防犯教室の内容



(1) 防犯教室実施要領について

01 学校のニーズを反映

過去に防犯教室を受講したことがあるか、あればその内容を把握し、学校のニーズを反映します。
※事前アンケート用紙を使用します。(次頁参照)

02 年代で分ける

低学年、中学年、高学年に分けます。この年代の子供には、この内容だけは覚えて欲しいという内容を入れます。

03 4つの視点

「防犯」を4つの視点で捉え、子供自身が危険回避能力を身につける内容を構成します。

- ①危険予測 ②危険回避 ③意思表示 ④相談・報告

04 カリキュラムの立案など

学校と事前に打合せを十分行って、意向に沿ったカリキュラムを策定するとともに状況に応じてタイムテーブルを作成するなど、教職員に相談します。

防犯教室に関する事前アンケート用紙

防犯教室をより充実したものにするために、事前に確認させていただきたい事項です。ご協力をお願いします。

○ 貴教育機関の御担当者

学校名

連絡先 () - FAX

Email

担当の先生のお名前

○ 希望日時 年 月 日 (曜日)

開始時間 時 分 / 時 分 (時間目)

○ 場所 体育館 教室 () 校庭・園庭
 その他 ()

○ 学年 (年齢) と子供の数 年生 約 人

○ 今回の防犯教室で取り扱って欲しい内容やテーマ

○ 希望する教材 DVD 大声測定器 その他 ()

○ 過去に警察職員の実施する防犯教室を受講したことはありますか。 あり なし

○ これまでに実施している防犯教室の内容

○ 保護者の参観 あり なし ○ 地域の方の参加 (参観) あり なし

○ 今までに被害にあったり、ケアの必要なお子さんはいますか？

○ その他、連絡事項があれば、お書きください。

連絡先 警察署生活安全課 担当者名 電話・FAX

(2) 低学年向けの内容

低学年用

パターン 01 危険予測

所要時間 5～10分

あなたを見守っている大人は味方、みんなで安全をつくっている。

目的

子供の安全を始めとする地域の安全は、地域に住む方々、ボランティアの方々、保護者、警察などいろいろな人たちの力で守られていることに気づかせ、その方々へ感謝の気持ちを持つことが大事であることを伝えます。



指導方法

身の回りで、安全を守ってくれている人には、どんな人がいるかあげてもらいます。

(例) 家族、PTA、見守りのボランティアの方、学校の先生、「こども110番のいえ」の方、警察官など

.....
そうすることで、子供たちは地域のたくさんの大人が、子供の安全を守ってくれていることに気づきます。



.....
地域を守る活動をしている人たちへの感謝を忘れないこと、挨拶をして顔見知りになることで、大人も子供も元気が出て気持ち良く過ごすことができます。何か怖いと思うことがあれば、周りの大人にすぐ知らせることが大事であることを指導します。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

感謝の気持ちをこめて、大きな声でしっかりと挨拶ができるといいですね。地域に住む方々、ボランティアの方々もみんなに声を掛けられると辛いことも吹き飛ばすくらいうれしく感じられておられます。笑顔で“おはようございます”“こんにちは”“ありがとうございます”と大きな声で伝えられることはとても大切なことです。



話すときの人との距離を考える。**目的**

近づいてくる人が「良い人か、悪い人か」を判断することは大人でも難しいことです。相手が不審な行動に出たら、いつでも逃げることをできるようにしておくことが大切です。そのために、相手に近づき過ぎず、安全な距離をとることを学びます。

指導方法

代表の子供に前に出てきてもらいます。

指導者と代表の子供が向き合い両名が互いに「前へならえ」をします。お互いの指が触れない距離まで離します。(約 1.2m)

「知らない人、知っているけど親しくない人」との距離は、この位であることを説明します。この位の距離だと相手が手を伸ばしても子供に触れられないことを説明します。

その後、指導者と子供が一步ずつ歩み寄ります。

この距離は(約 70cm)、相手に手が届くくらいの距離で、親しい間柄の親や友達との間の距離であることを説明します。「知らない人」なのに、この距離まで近づいてくる人は、「注意しないといけない人」であることも説明します。

次に、子供全員に立ってもらい、体操のできる隊形に広がって2人1組になり、この動作を実際に体験させ、人との距離を確認してもらいます。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

良い人か悪い人か、見た目で決めるのは難しいです。声を掛けてくれた人が本当に地域の優しい人だったら、悪い人だと思うのは申し訳ないし、かといって悪いことをしようとする人でもニコニコしながら声を掛けてくることもあるかもしれない。そういうときはどうしたらいいでしょうか。

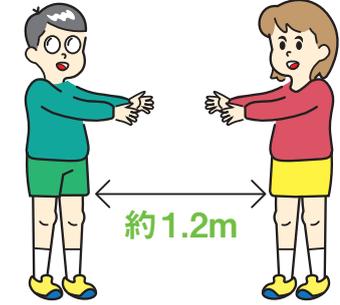
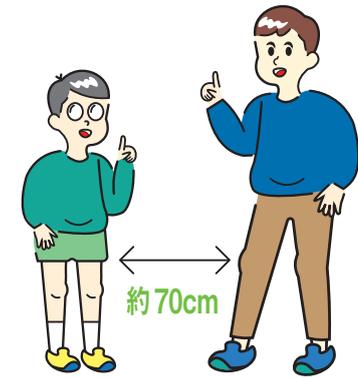


02

大人の人につかまえられるかもしれないと思ったときに、いつでもすぐに逃げられるように準備しておくといいですね。どのくらいが安全な距離でしょうか。



▶実技要領をイラストで示します。

内容	絵コンテ
<p>子供2人が互いに「前にならえ」の姿勢で向かい合う。 お互いの手が触れない距離</p>	 <p>約1.2m</p>
<p>子供が1歩ずつ歩み寄る。</p>	
<p>子供と大人が向かい合って立つ。 距離は約70cm、知らない人、知っているけど親しくない人でこの距離まで近づく人は、「注意しなければいけないかもしれない人」</p>	 <p>約70cm</p>

※子供への約70cmの説明は、「相手に手が届くくらいの距離」など例示して説明します。

令和3年3月現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ソーシャルディスタンスを取ることが求められています。

ソーシャルディスタンスについて、人と離れる距離は最低1m、2m以上離れることがベストとされていますので、上記の実習ではソーシャルディスタンスの説明を行い、子供同士が近づき過ぎることのないよう配慮して行います。

**出かけるときに気をつけることを知る。
ひとりになったらどうするか考える。**

目的

子供たちに「いつも外に出かけるときに保護者と約束していること」、「注意されること」をあげてもらい、外出時の危険と約束を守ることの大切さを確認してもらいます。

指導方法

子供たちに、出かけるときに気をつけることを自由にあげてもらいます。
外出する場所や時間、人数などによって状況が変わるので、子供たちが答えやすいように具体的に「友達と公園に行くとき」や「友達の家に行った帰りにひとりになったとき」などシチュエーションを提示して発問します。

またひとりになったときのことについて、クイズ形式で質問し、子供の答えを聞いていきます。

Q1 友達と一緒に公園に行き、友達が帰ると言いました。君はどうしますか。

Q2 ひとりで帰るとき、どんな風に歩きますか。

子供の答えの例：「早歩きで」、「たまに後ろを見てついてくる人がいないかどうか見ながら帰る」など、いろんな答えが出てきます。

数人に答えてもらった後、外出時の危険と約束を守ることの大切さを説明します。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

外へ出かけるときにどんなことに気をつけたらいいかな。家の人とどんな約束をしているかな。



子供の答えの例：「家の人に”誰とどこに行くか””何時に帰るか”を言ってから出かける」、「停まっている車に運転手が乗っているか、乗っている場合は運転手からの声掛けに気をつける」、「暗くなる前（電柱の明かりが灯る前）に家に帰る」、「ひとりで家に帰るときは、広い明るい道を通って帰る。」、「寄り道をせず帰る」など



02

みんな、外へ出るときは、いろんなことに気をつけていますね。家の人みんなのことを心配して約束をしているので、しっかりと守るようにしましょう。



子供たちに、外出時は保護者に「誰とどこに行くか」、「何時に帰るのか」を告げるよう指導をお願いします。

防犯標語「いかのおすし」を知り防犯の基本を楽しく学ぶ。

目的

親しみのある防犯標語「いかのおすし」を楽しく覚え、防犯の基本をわかりやすく身につけてもらいます。

指導方法

パネルなどを使い、子供たちにことば1つ1つについてどのような内容が当てはまるのか質問して考えてもらいます。

1つ1つの行動について、丁寧にその状況や対処方法について説明します。

いかのおすし

い かない



の らない



お おごえでさけぶ



す ぐにげる



し らせる



指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

いかのおすしの標語を知っていますか。繰り返し学校の先生から聞いているので、覚えている人も多いと思いますが、この機会にもう一度、思い出してみましょう。



02

“知らない人”にはついていかない“ということだけではありません。“知っている人”でもおうちの人と決めた人以外にはついていかないようにしましょう。



声を掛けられたらどうするかを考える。

目的

ひとりで歩いている時などに、誰かに声を掛けられた時の対応について考えます。誘いを受けてもしっかりと断る方法や逃げる方向を考え、被害に遭わない方法を確認します。

指導方法

なるべくひとりで下校しない、ひとりにならないことが大切ですが、下校などで見守りのボランティアの方々のいない通学路など、どうしてもひとりになることがあります。

子供たちに“だれかに声を掛けられたらどうするか”を発問し、答えてもらいます。数人答えてもらった後、具体的にどのように対応するか説明します。子供への声掛けは善意によるものと悪意によるものがあります。大人から声を掛けられたら一律に断る、無視して走って逃げると教えるのは適切ではありません。パターン②で示したように、相手と一定の距離を保ちつつ道を尋ねられたら方角を示すなど、その場でできることは対応することを教えます。移動を伴う依頼などは対応しないよう指導します。

その後、代表の子供数人に出てきてもらい、指導者が不審者となり、子供に声を掛ける対応のロールプレイングを行います。ロールプレイング終了後、その都度良かった点（きっぱりと断って逃げることができたなど）を褒めます。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

下校するときや公園でひとり遊んでいるときなどに、誰かから声を掛けられたらどうするか考えてみよう。その人が近づいてきたら距離を取るようにしましょう。

(低学年パターン②危険予測参照)



02

“お父さんが急に病院に入院することになったから一緒に来てくれる”などと声を掛けられたらどうしますか。みんな“自分について行かない。大丈夫”だと思っているかもしれませんが、どんな風に相手の人に話をするか考えてみましょう。

子供の答えの例：「一度お家の人に聞いてからにします。」など



知らない人に声を掛けられて断っても、子供なので失礼になりません。大丈夫です。断ってもついてくるような人の場合は、走って逃げましょう。その時もランドセル等が重くて走れないと思ったときは、置いて逃げてもいいです。

03



※自宅のない子供もいるのでその場合は「保護者」と言い換えて説明します。

家に帰った後や夏休みなど休み中の行動を考える。

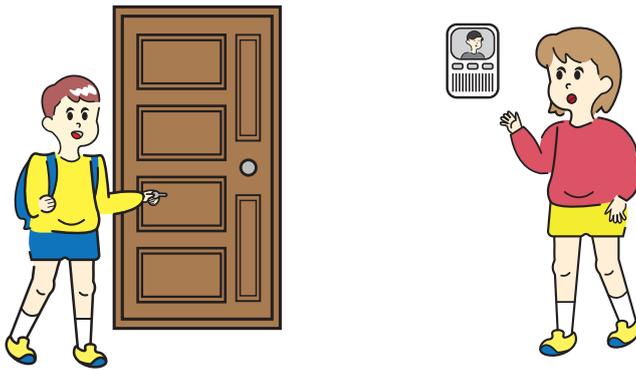
目的

家に帰った後や夏休みなど休み中、子供だけで在宅（留守番）しているときの防犯対策について、被害に遭わないための行動を確認します。

指導目的

子供たちに“家に着いて玄関の鍵を開けるとき”の行動や“家にひとりであるときに、誰かが訪ねてきたらどうするか”を発問し答えてもらいます。

数人に答えてもらった後、具体的にどのように対応するか説明します。



指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

家に帰って玄関のドアを開けるとき、皆どんな風になっていますか。



子供の答えの例：「周りを見回して不審な人がいないか確認してから玄関の鍵を開ける。」など

02

留守番をするときにお客さんが来たときや電話の取り方について保護者の方と約束をしていますか。



子供の答えの例：「約束をしています。」「チャイムが鳴っても出ない。」「玄関ドアは開けません。」「鍵を閉めておきます。」「誰もいなくてもただいまと言ってドアを開ける。」など

03

もしも、保護者の方と約束をしていない人がいたら留守番するときの約束を決めるようにしましょう。



04

家に帰って、保護者の方とあらかじめドアを開けてもいいと決めている人以外は、お家に人が来てもドアを開けないようにしましょう。



(3) 中学年向けの内容

中学年用

パターン 01 危険予測

所要時間 10～15分

人について考える。支え合うまち

目的

子供たちは、日常生活の中で、地域のボランティアや見守りの方々に見守られ過ごしています。その方々と挨拶を交わし、顔を知り、つながりを持ち、子供たちは社会の中で生活しています。しかし、社会の中には善良な大人だけでなく、わいせつ行為や誘拐しようとするなど悪意を持つ大人もいます。そのような大人を見た目だけで判断することはできません。悪意を持つ「悪い人」について、「黒い服を着てサングラスをしている」という「見た目」だけで判断することはできません。その人のどんな様子を見て、判断するのか子供に考えてもらいます。「見た目」ではなく、「何か変だな。」と違和感を持つような行為（じっと見る、不自然な声かけ、掴む、触る、追いかける、つきまとうなど）をする人がいれば、「知っている人」、「知らない人」に関わらず、その場から離れ（逃げ）なければいけないということを子供たちに認識してもらいます。

指導目的

下校するときや遊びに行ったときに声を掛けてくる大人について、具体的に「ひとりで家に帰っているときに、道を教えてほしいと言われたら。」「ひとりで公園から帰ろうとしたときに、おなかが痛いと言っている人がいたら。」などシチュエーションを提示して発問します。「知らない人から声をかけられたら、逃げようね。」という風に一律に逃げるよう教えることは、善良な大人とのコミュニケーションを阻害することとなり適切ではありません。人は見た目だけでは判断できないこと、「知っている人」、「知らない人」に関わらず、「何か変だな。」と感じたらその場から逃げなければいけないことを子供たちに指導します。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

ひとりで歩いているときに道を教えて欲しいという人がいたら、ひとりで公園から帰ろうとしたときに、おなかが痛いと言っている人がいたらどうしますか。



子供の答えの例：「方向を指しながら、道を教えてあげるけど、一緒にはついて行かない。」「道を聞かれたら教えてあげるけどその人に近づき過ぎないようにする。（距離を取る）」、「おなかが痛いと言っている人がいたら近くにいる大人を呼びに行く。」など



声を掛けてくる人の様子をしっかりと「見る」ようにしましょう。もし「少しおかしな感じがする人だな。」と思ったらすぐにその場から離れる（逃げる）ようにしましょう。

02



遊びに行くときの約束や気をつけることを考える。

目的

子供たちに、「遊びに行くとき保護者と約束していること」、「自分で気をつけていること」について確認してもらい、外出時の危険と約束を守ることの大切さを確認してもらいます。

指導方法

子供たちに、出かけるときに気をつけることを自由にあげてもらいます。

外出する場所や時間などの違いで状況が変わるので、子供たちがイメージしやすいように具体的に「友達と公園に行くとき」、「習いごとや塾に行くとき」、「塾に行った帰りにひとりで自転車に乗っているとき」などシチュエーションを提示して発問します。

(低学年パターン③ 危険回避・意思表示 参照)

数人に答えてもらった後、外出時に気をつけること、約束を守ることについて説明します。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

外へ出かけるときにどんなことに気をつけたらいいかな。

01



いつも歩いている道に何かあったときに逃げることのできる場所はあるかな。

子供の答えの例：「家の人に”誰とどこに行くか”、”何時に帰るか”を言ってから出かける。」「車に気をつける。」「暗くなる前に家に帰る。」「ひとりで家に帰るときは、早歩きをして歩く。」「たまに後ろを振り返って見る。」「何か怖いことがあったら〇〇の「こども110番のいえ」か、〇〇にあるコンビニに行く。」「カギを持っていることが他の人から見えないようにしている。」など



家のカギはどのようにして管理していますか。

みんな、外へ出るときは、いろんなことに気をつけていますね。しっかりと守るようにしましょう。

02



車に乗っている人から声を掛けられたときの行動を考える。

目的

子供たちに車に乗っている人から声を掛けられたときの行動について確認してもらいます。

指導方法

子供たちに、車に乗っている人に声を掛けられたときの対応を自由にあげてもらいます。外出する場所や時間などの違いで状況が変わるので、子供たちがイメージしやすいように具体的に「ひとりで歩いて公園に行くとき」、「自転車に乗っているとき」などシチュエーションを提示して発問します。

数人に答えてもらった後、具体的にどのように対応するのか説明します。

一般的に子供たちに、「車の進行方向と逆に逃げましょう。」と説明していますが、声を掛けられた時間や場所により対応は変わってきます。声を掛けられた場所から車の進行方向の数メートル先に「こども110番のいえ」や自宅や商店、コンビニエンスストア、学校などがあった場合は、たとえ車の進行方向であっても自宅やコンビニエンスストアなどの方向へ逃げるなどの対応が適切な場合もあります。

子供たちに車のパネルを用いて「こども110番のいえ」、自宅や商店、コンビニエンスストアなどの位置関係を説明するなどして、どちらに逃げたらいいのかとその理由について、子供たちに発問します。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

車に乗っている人などから声を掛けられることがあります。声を掛けられたからすぐ逃げないといけないということはありません。ただ少しおかしいな、怖いなど感じたら、どちらの方向に走ったらいいのか自分で考えてその場から立ち去る（逃げる）ようにしましょう。



02

怖いと感じて逃げる時は大きな声や防犯ブザーで周囲の人に助けを求めましょう。



03

逃げる場合は他の車にも注意するようにしましょう。



運動場や教室に先生以外の大人が来て子供に声を掛けたときの対応を考える。

目的

学校は地域の方々などのコミュニケーションの場でもあり地域の方も多数来校されます。学校では来校目的のはっきりしない者を校内に入れないようにしていますが、万が一のことを考え、学校で休み時間などで運動場や教室に先生以外の大人が来て子供たちに声を掛けたときの対応を子供たちに考えてもらいます。

指導方法

子供たちに、運動場や教室で先生以外の大人から声を掛けられたときの対応について発問します。

▶子供の答えの例：「こんにちは」と挨拶をして職員室に案内します。」「知らない人だったら走って職員室に行きます。」「知っている人でも少し変だなと感じたら先生を呼びに行きます。」など

子供たちには、「知らない人から声を掛けられたらすぐに逃げる。」ということ指導するのではなく、適切な距離（約1.2m）を取りながら対応し、少しでも変だなと感じたら、その場からすぐに逃げて職員室へ知らせに行くか、一番近くにいる先生に知らせよう指導します。

（人と話をするときの距離については低学年用危険予測パターン②参照）



指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

学校には地域の人などがたくさん来られます。それらの人が教室やグラウンドに来られたら、どのようにしていますか。まず挨拶をしますよね。

01



もしも、地域の人などが君に話かけてきたら、適切な距離（約1.2m）を取りながら、話をしましょう。

職員室に案内したり、近くにいる先生に知らせようにしましょう。

知らない人が、すべて不審者というわけではありません。

02



少しでも何か変だなと感じたり、危険なものを持っているような場合はすぐに先生や周囲の友達に知らせてください。

周囲の大人に知らせるため、大声を出す練習をしてみよう。

目的

危険な場面に遭遇したときに、周囲の大人に知らせるために大声を出すことが大切です。実際にそのような場面になったとき、体が震えるなどして声を出すことができなかったり、思っていたより声が出なかったということがありますので、音量測定器を使用し、大声を出す練習をして、自分がどれだけ大声を出すことができるのか子供たちに体感してもらいます。

指導方法

最初に子供ではなく、先生など大人に体験してもらいます。音量測定器から約2m離れた位置に先生に立ってもらって「好きなことば」を叫んでもらいます。音量測定器で音量を測定し、〇〇デシベルであったことを説明します。(90デシベル以上なら合格)その後、なるべく全員に実施してもらいます。時間が無ければ子供たち数人に大声測定を体験してもらいます。



指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

怖いと思う場面では大きな声で周りの大人に知らせることが大切です。実際に大きな声を出す練習をしてみましょう。何か好きなことばを叫んでみてください。音量測定器で90デシベル以上出すことを目標にしましょう。

01



90デシベルは防犯ブザーの音です。

みなさん、大きな声を出してみてどうでしたか。思っていたより声って出せないなと感じた人もいるかもしれません。もしも声を出すことができなったら、防犯ブザーを鳴らして周りの大人に知らせるということもできます。

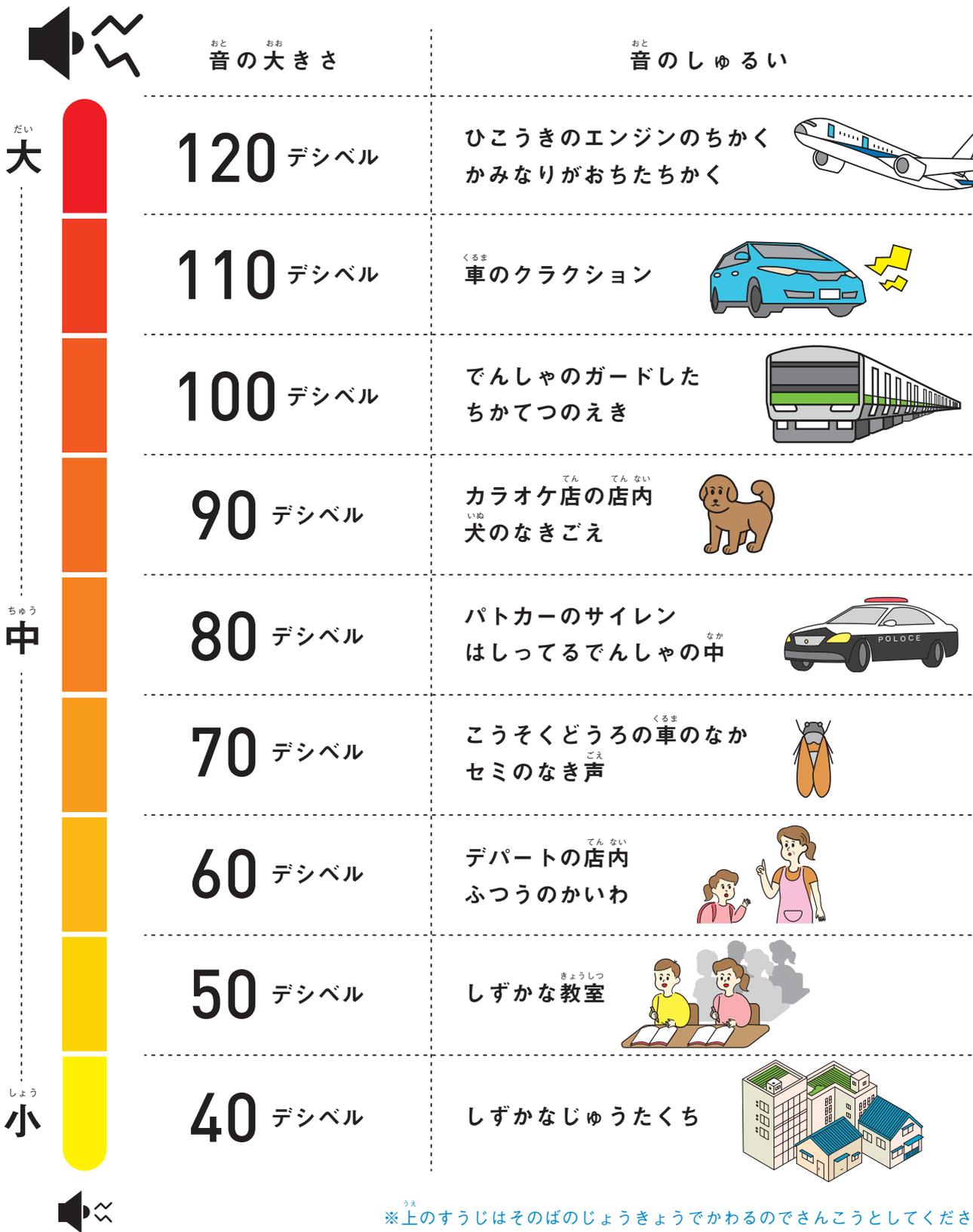
02



(中学年パターン⑥ 防犯ブザーの使い方を学ぶ 参照)

みんなのこえはなんデシベル？

デシベル (dB) は音の大きさおと おおをあらわすものです。



※上のすうじはそのばのじょうきょうでかわるのでさんこうとしてください

防犯ブザーの使い方を学ぶ。

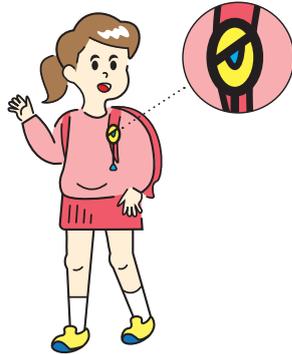
目的

危険な場面に遭遇したとき、とっさに大声を出して助けを呼ぶことが大事ですが、いざという時に驚いて体が固まってしまう、声が出せなくなることがあります。そんなときは防犯ブザーを鳴らし、周りの大人に知らせることが有効です。すぐ使える場所に防犯ブザーをつけることや、鳴らし方を練習します。また、どんなときに鳴らすかを確認します。

指導方法

代表として、2人位の子供に前に出てきてもらいます。用意したランドセルやリュックサックのどの部分に防犯ブザーをつけるか、質問します。ランドセルなら背負いベルトの胸に近い位置など、引っ張りやすい場所に取り付けるよう指導します。

次にどんなときに鳴らすのか質問します。その後指導者が後方から子供に声を掛け、実際に防犯ブザーを鳴らすことを体験してもらいます。



子供がランドセルの背負い部分に防犯ブザーをつける



誰かに追い掛けられるなど怖いと思った場面で防犯ブザーを鳴らす

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

防犯ブザーはどんなときに鳴らしますか。

01

子供の答えの例：「怖いなと思ったときに鳴らします。」「誰かに腕をつかまれたりしたときに声が出なかったときに」など



自分が「怖い、いやだ」と思ったら鳴らしたらいいです。ただいきなり鳴らすのではなく、まず声をかけられたり、誘われたことに対して、イエスなのかノーなのか意思表示をしましょう。もしも悪い人でなかったのに防犯ブザーを鳴らしてしまったとしても、それは仕方ないことなので大丈夫です。子供は間違っただけです。そのときはごめんなさい。と素直に謝ることが大事です。

02



(4) 高学年向けの内容

高学年用

パターン 01 危険回避

所要時間 5～10分

社会とのつながりを実感し、防犯に対する社会参加行動を考える。

目的

高学年になれば、低学年や高齢者への配慮、例えば困っている低学年や高齢者などに声を掛け手助けするなど、自分以外の人の安全のためにできることが増えてきます。また日々見守りをしてくださっているボランティアの方々の活動の大切さを理解することもできるようになります。子供たちに人と人とのつながりを重視した取組を通じ、自分も社会の役に立つことができるということを実感してもらい、将来地域のための社会参加行動をする担い手としての自覚を高めます。

指導方法

集団登校や学校の縦割り活動などで、低学年などに対して気をつけていること、電車やバスに乗ったときに、気をつけていることについて子供たちに発問します。

▶子供の答えの例：「集団登校で、道の真ん中にはみ出して列を乱している子供に声掛けをして並んでもらう。(事故防止)」、「学校の縦割り活動で一緒に活動できていない低学年などに対して声を掛けてスムーズに活動を進める。」、「バス停で時刻表が見えない高齢の方がいたら時刻表を見て教える。」など

子供たちの様々な答えを受けて、その活動が社会全体の防犯（安全）に今後つながっていくことや、継続して社会参加活動を行っていくよう伝えます。社会貢献度が高い防犯の取組はひとりひとりの行動の積み重ねが大切です。みんなのために何ができるのか想像をめぐらし、自分の行動に反映させていくことが大切です。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01
集団登校や縦割り活動などで気をつけていることはありますか。



02
バスや電車に乗るときなど高齢の方などに対して気をつけていることはありますか。



03
みんなの活動が、住みやすいまちづくりや、まちの防犯(安全)につながっていきます。今みんなは学校の先生や見守りのボランティアや保護者の方に守られています。少しずつ自分が他の人のためにできることを増やして行って町の安全のための活動ができるといいですね。



通学路などの安全について考える。

目的

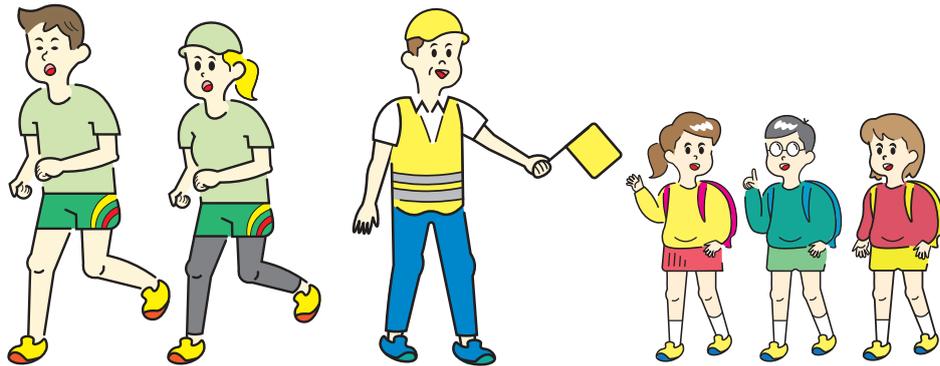
通学路などの安全や危険性について子供たちに考えてもらい、危険予測・危険回避能力を身につけます。

指導方法

子供たちに、通学路などで気をつけないといけないと感じている場所について自由に発言してもらいます。

子供たちがイメージしやすいように、写真やイラストを子供に提示して発問します。

班で話し合いをするなどした後、数人に答えてもらい、危険回避の要領について説明します。



指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

いつもどんな道を選んで歩いていますか。



子供の答えの例：「広い道を選んで通ります。」「人通りの多い道を歩きます。」「道に車が停まっているとき、運転手が乗っているときは車が停まっているのと反対側を通ります。」など。



02

子供だけになりやすい場所では、注意が必要です。なるべくひとりにならないようにしましょう。ひとりになるときは、狭い道より広い道、人通りの少ない道より多い道、暗い場所より明るい場所を選ぶようにしましょう。時間帯によって場所の様子は変わってきます。そんなことも考えながら道を選ぶことが大切です。



歩く時の注意、後ろにも気をつける。

目的

登下校時や外出時の危険性を知り、ひとりで歩いているときには、どんなことに気をつけたらいいかなど体験を通じて子供たちに考えてもらい、危険予測・危険回避能力を身につけてもらいます。

指導方法

代表の子供2人に前に出てきてもらいます。約2m離れて前後に並び、前の子供には好きなように歩いてもらいます。後ろの子供には、同じ間隔を保ちながら前の子供について行ってもらいます。30秒くらい続けます。

前の子供、後ろの子供それぞれに感想を言ってもらいます。ひとりで歩いているときに、時々後ろを振り返って見ると、後ろの危険に気づけることと、後ろを振り返ることで周りを警戒していることが周囲に伝わり、危険予測・危険回避につながることを伝えます。

その後、他の子供も体操の隊形に広がってもらい、2人1組で同様に歩いて体験してもらいます。

指導者から子供たちへの声かけ・ヒント

普段歩いているときに気をつけていることはありますか。今日は代表の人に前に来てもらい、歩くときの注意について考えてみましょう。

01



ロールプレイ

前の子供：たまに後ろを振り返りながら歩く
後ろの子供：途中で距離を詰めて歩く

02

ひとりにならないようにすることが大事だけどひとりで行動することも多いと思います。よそ見をしたりスマホをしながら歩いたりなど「ながら歩き」をせず、前を向いて歩きましょう。また、たまに後ろを振り返ってだれかがいないか確認しながら歩くようにしましょう。何度も振り返っていると警戒して歩いていることが周りにもわかります。



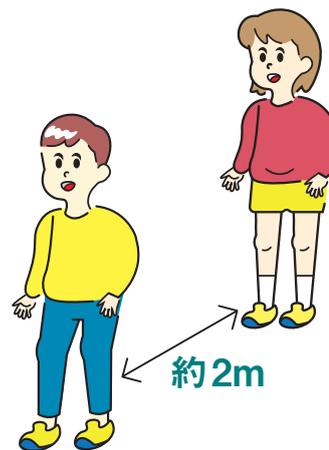
後ろを振り返りすぎると前から来る車などに気がつかない場合があるので、後ろばかり見過ぎないようにしましょう。また、振り返らなくても建物のガラスで後ろを確認することもできます。

03



▶子供が2人1組で体験します

子供2人が前後に並んで立つ。



前の子供が後ろを振り返ると後ろの子供がすぐ後ろに立っている。
距離は約1m



▶建物のガラスで後ろを確認することもできる

建物のガラスで後ろを確認することもできる。



エレベーターに乗るときの行動を考える。

目的

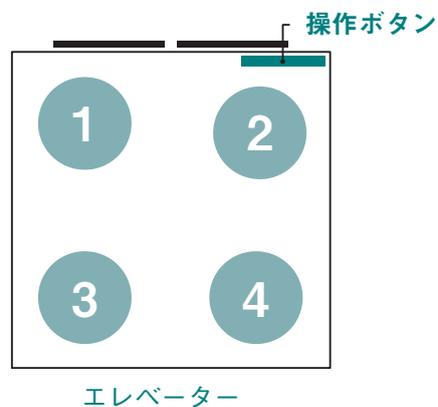
ひとりでエレベーターに乗るときの危険性を知り、どのように危険回避するのか、考えてもらいます。

指導方法

エレベーターのイラストを用いて、どの位置に乗るのか、またその理由について子供たちに発問します。

また、エレベーターに「注意しないといけない人だな」と直感的に感じる人が乗ってきた場合の対応について子供たちに発問します。

数人に答えてもらった後、危険回避要領について説明します。



指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

“注意しないといけない人だな”と直感的に感じる人とは一緒にエレベーターに乗らないようにしましょう。例えば、カバンの中の何かを探すふりをするなどしてその人と一緒にエレベーターに乗らないようにします。



みんなひとりでエレベーターに乗るときはどの場所に立ちますか。①だと思える人はいますか。(以下番号順に確認していく。)

02



エレベーターは密室になります。もしも、どうしても変だなと思う人と一緒に乗ることになれば、すぐに降りることができるよう操作ボタン前(②の位置)に立ち、乗っている人の動きが見える形で立つようにしましょう。

03



04

乗ってきた人について、直感で「変だな」、「怖いな」と感じたら、すぐに近くの階のボタンを押しておきましょう。その時に、“あっ、忘れ物した。”などと言って降りるのもよいでしょう。



気になることがあれば、信頼できる大人に相談する。**目的**

年齢が大きくなるにつれて、保護者の方に話をするのが少しずつ減る傾向があります。しかし、普段と違う出来事があり（例えばあまり見かけない大人が通学路に立っており、わいせつ目的で連れ去る子供を物色していたなど）後に犯罪につながるようなケースもあります。子供たちに、気になるようなことがあれば、保護者の方や学校の先生、地域の方などに話をするように伝え、大人が対応することで犯罪を防止していきます。

指導目的

子供たちに、「通学路などを歩いていて何か気になることがあればすぐに話をする相手がいるか。」と発問します。

▶子供たちの答えの例：「お父さん、お母さん」、「学校の先生」、「友達」、「こども110番のいえの人」、「見守りの人」など

子供たちに話をする相手について確認し、いつもと違うことがあれば、保護者の方や周りの大人に知らせるよう伝えます。大人がそのようなちょっとした変化を知ること、それが犯罪につながる出来事であった場合、犯罪を未然に防止することができるかもしれません。

指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

いつもと違うことや自分の直感で少し気になるようなことがあれば、周りの大人に話をするようにしてください。もしも、それが犯罪につながるようなことだった場合、大人に話をすることで解決できることもあります。



02

もしも、友達からそのような相談を受けて、自分たちだけで解決することが難しいと感じたときは、周りの信頼できる大人（学校の先生、保護者の方など）に話をするようにしましょう。子供だけで考えて解決することが難しいと思う場合でも大人なら解決ができる場合もあります。



もし被害に遭ったとしても、悪いのは犯人で、被害に遭った子供は悪くないです。決して自分を責めないでください。

習いごとなどの帰りで遅い時間にひとりで帰ることになったときの行動を考える。

目的

学年が上がるにつれ、習いごとなどで帰宅時間が遅くなる場合があります。子供がひとりで遅い時間に行動することは危険を伴うことから、保護者の方に迎えに来てもらえたらよいのですが、迎えに来てもらえない時もあります。基本的な対応は昼間と同じですが、遅い時間にひとりで帰宅することになったときに気をつけるべきことを確認します。

指導方法

習いごとや塾などで帰りが遅くなったときにどのようなことに気をつけているか子供たちに発問します。
▶子供の答えの例：「友達と一緒に帰るようにしている。」「家の人に迎えに来てもらう。」「人通りの多い道や明るい道を通るようにする。」「家の近くまで保護者に迎えに来てもらう。」「たまに後ろを見ながら、早歩きで帰る。」「怖いと感じることがあったときに駆け込む場所を考えておく。」など

.....
昼間と夜間では街灯の有無で極端に周囲が暗くなったり、危険度が異なる場所もあります。子供たちには、できるだけひとりにならないことや人通りの多い明るい道を通るように伝えます。

.....
子供たちに、もしも、帰宅中に後ろをついてこられたりした場合は、「こども110番のいえ」、「コンビニエンスストア」などの店舗に逃げることを、反対に助けを求めることができなくなるトイレや袋小路になる場所（道）などに逃げないことを伝えます。



指導者から子供たちへの声掛け・ヒント

01

習いごとの帰りで遅くなったときはどんなことに気をつけますか。」「帰宅するときどうしてもひとりになることも多いと思いますが、できるだけ友達と一緒に帰るようにしましょう。人通りの多い明るい道を通るようにしましょう。何かあれば駆け込むことのできる場所を考えておきましょう。



02

トイレなどの個室や袋小路になる場所（道）に逃げ込まないようにしましょう。



● (5) 小学校の特別支援学級や特別支援学校に向けての工夫 ●

特別支援学級や特別支援学校に在籍する子供のほか、通常の学級にも特別な支援の必要な子供が在籍している場合があります。
子供たちの発達と障害の種類と程度は様々です。

事前に学校の先生方から子供に必要な指導内容や特に配慮の必要な子供について確認をした上で、指導をお願いします。例えば支援を要する子供が防犯教室にうまく参加・活動できるよう、日頃の授業での工夫などを担任の先生から聞き取り、情報共有をしておきます。子供たちに必要な支援は様々であることを念頭に担任の先生などと連携するようお願いします。

担任の先生との連携内容について

● 学習のねらいについて（子供の実態に見合ったものかどうか。）

● 指示の仕方や発問について（今何を考える・何をやるかわかりやすくする。）

● 視覚的な支援等（授業のユニバーサルデザイン[※]）について

- 学校で知り得た情報は、守秘義務の徹底が必要

● 授業のユニバーサルデザイン

▶ 特別支援教育の視点で、発達障害等のある子供を含めてすべての子供が学びやすいように、授業を改善・工夫します。

発達障害等のある子供が学びに参加しやすい授業は、すべての子供にとってわかりやすい授業といえます。

(例) 始めに授業の流れ（スケジュール）を写真や文字で提示する。

黒板のチョークは、白色か黄色等を使い、多くの色を使い過ぎない。

赤色を使用しない。

めあてなどを説明するときは、マグネットやカードなどを活用する。

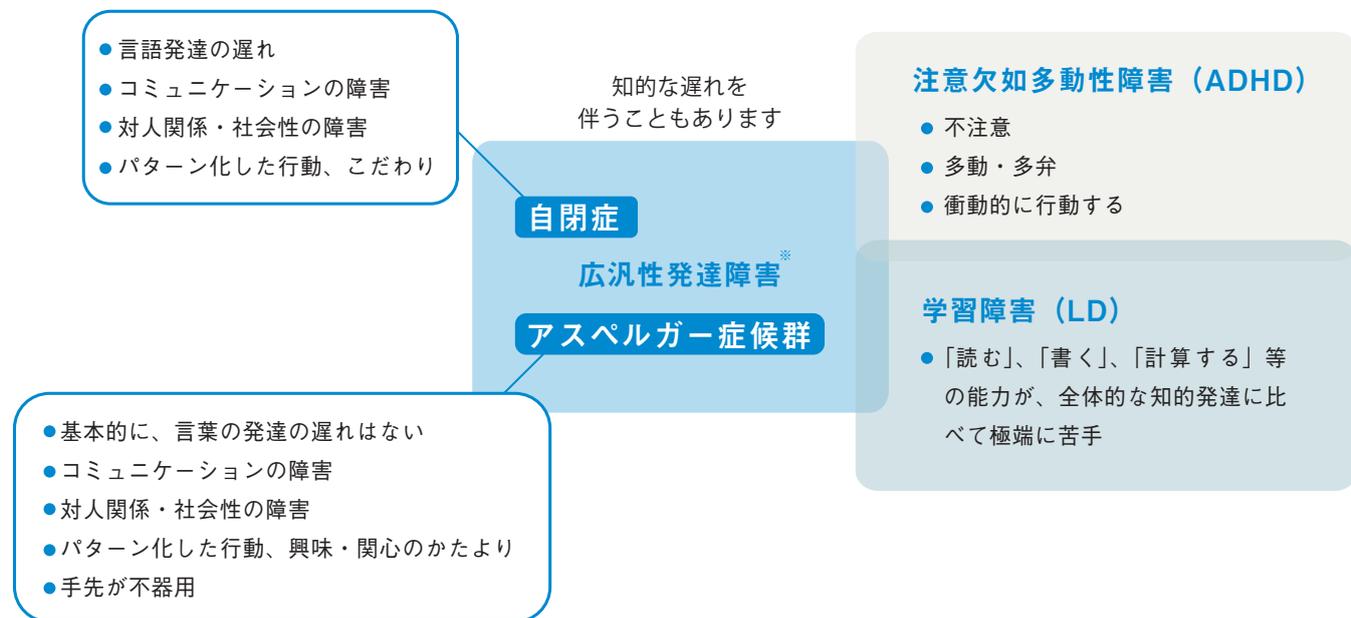
カラーで作成した資料は、モノクロ印刷をした場合にも色の違いがわかるかどうかを確認しておく。

出典：京都府スーパーサポートセンターホームページ

発達障害のタイプと特性を理解しましょう

発達障害とは？

発達障害は、生まれつき脳の一部の機能になんらかの不具合があり、成長や発育にアンバランスが生じたため、行動や情緒に偏りがみられるものです。発達障害には、「自閉症」、「アスペルガー症候群」、「注意欠如多動性障害（ADHD）」、「学習障害（LD）」などいくつかのタイプがあります。これらの障害によって、生活のしづらさを感じている人たちがいます。年齢を重ねるにつれ、症状が目立たなくなる人もいれば、大人になってから診断を受ける人もいます。



※最近では「広汎性発達障害」にかわり、「自閉症スペクトラム障害（ASD）」という診断名が使われています。

特性は人によってさまざま

いくつかのタイプの特性が少しずつ重なりあっている場合も多く、「診断名どおり」という人はほとんどいません。障害の程度や環境などによっても症状はさまざまであることから、私たち誰もが持っている個性の延長線上にあると考えるのが自然です。

出典：厚生労働省ホームページ
京都府商工労働観光部「発達障害者と共に働けるほどガイドブック」

（6）家庭・地域との連携

学校・保護者・地域ボランティアなど大人が行う防犯指導が統一した内容となるよう学校に対し、実施した防犯教室の内容を保護者に配布する行事予定表や学校のホームページ内に登載してもらうなどして連携に努めてください。

（7）学校と連携した振り返りの仕方・検証

防犯教室後、学校の先生方に御協力をいただいてアンケートを実施し、内容等について振り返りを行うようお願いします。

※事後、学校の先生方に次頁のアンケート用紙を配布し意見を貰うこととします。

防犯教室に関する振り返りアンケート用紙

本日はありがとうございました。今後の参考にさせていただきますので忌憚のない御意見をお願いします。

○ 貴教育機関の名前、担当の先生のお名前

貴教育機関名

担当の先生のお名前

○ 実施日時、時間

年 月 日 (曜日)

○ 場所

体育館 教室 () 校庭・園庭

その他 ()

○ 学年 (年齢) と子供の数

年生 約 人

○ 今回の防犯教室の内容やテーマ

パターン ()

内容 ()

01. 防犯教室の内容について

① 大変よかった ② よかった ③ あまりよくなかった ④ よくなかった

⑤ その他 ()

02. 01で①、②を選んだ理由について

① 体験型の内容は子供たちの理解が進んだ。

② 従来実施していなかった内容で子供たちが初めて知る内容だった。

③ その他 ()

03. 01で③、④を選んだ理由について

① わかりにくかった。 ② 地域の防犯の状況と合っていなかった。

③ 体験型の内容だったが、子供たちが理解しにくそうだった。

④ その他 ()

04. 他にこんな指導パターンがあればいいと思われるものがあれば、お書きください。

05. 今後、子供の防犯について知りたいことをお書きください。

06. その他、ご意見を自由にお書きください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」が策定されました

令和2年6月11日、政府の関係府省会議で「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」が策定されました。その中で子供に関する項目として、「子供を性暴力の当事者にしないための生命（いのち）の安全教育の推進」が設けられ、「学校等における教育や啓発の内容の充実」に関しては、文部科学省・内閣府・警察庁の共管事業とされています。

以下、「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」の一部を紹介します。

子供を性暴力の当事者にしないための生命（いのち）の安全教育の推進

文部科学省

性犯罪・性暴力の加害者には、低年齢児を含め、子供を狙っている者もいる。また、実の父親や義理の父親など、監護者や親族が加害者となる事例も多く、さらに、子供のうちはそれが性被害だと気が付かず、年齢を重ねていくうちに気が付き、被害後、時間が経過してから心理的に大きな傷を受ける場合がある。

本来、子供を性被害から守り、被害に遭った時に支えになるのは保護者や周囲の大人だが、家庭内に加害者がいる場合や、虐待などが生じている家庭もあり、親が子供に何をどのように教えればよいか分からない場合など、家庭がこの機能を十分に発揮できない場合もある。子供が性被害に遭い、その被害が継続することが、その後の学業や就労を含め、人生に多大な負の影響を与えていることを考えれば、性暴力の加害者や被害者、傍観者のいずれにもならないよう、学校教育がより大きな役割を果たしていくことが求められる。また、被害に遭ったとしても、学業が継続できることも重要である。

性暴力や性被害の予防や対処に関する教育については、諸外国における取組や、刑法の性交同意年齢が13歳であることとの関係を踏まえると不十分との指摘があることも踏まえ、その強化について速やかに具体的検討を進め、順次実行する。その際、教育現場に過重な負担がかからないよう、地方公共団体、教育委員会、学校、家庭、地域の専門家等、多様な主体が連携・協力して取組を進めることが重要である。（学校等における教育や啓発の内容の充実）

文部科学省・内閣府・警察庁・関係省庁

生命の尊さを学び生命を大切にする教育、自分や相手、ひとりひとりを尊重する教育をさらに推進する。加えて、今でも実際に被害に遭っている子供がいることから、有効な取組は直ちに進めるべきである。性暴力の加害者、被害者、傍観者にさせないため、就学前の教育・保育を含め、学校等において、地域の人材の協力も得ながら、また、保護者等の理解を得ながら、取組を推進する。

- 具体的には、性暴力の加害者や被害者にならないよう、例えば、
- ・幼児期や小学校低学年で、被害に気付き予防できるよう、自分の身を守ることの重要性や嫌なことをされたら訴えることの必要性を幼児児童に教える（例えば、水着で隠れる部分については、他人に見せない、触らせない、もし触られたら大人に言う、他人を触らないなど、発達を踏まえ、分かりやすく指導する等）。
 - ・小学校や中学校で、不審者等に付いていかないなど、性犯罪も含む犯罪被害に遭わないための防犯指導を行う。
 - ・小学校高学年や中学校で、SNS等で知り合った人に会うことや、自分の裸の写真を撮る・撮らせる・送る・送らせることによる犯罪被害を含む危険や、被害に遭った場合の対応などについて教える。
- (以下、省略)

出典：内閣府男女共同参画局ホームページ

この中で、「水着で隠れる部分（「プライベートゾーン」）を他人に見せない、触らせない。」等の指導項目は、プログラムのパターンの中に入っていませんがこの方針は警察職員として当然知っておくべき事項です。

現行の小学校学習指導要領にも、水着で隠れる部分（「プライベートゾーン」）を他人に見せないなどについて直接言及する項目はありませんが、保健の「健康な生活」、「体の発育・発達」などの単元や、特別活動の「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」の「心身ともに健康で安全な生活態度の形成」の項目が関連した内容となっています。

学校の実態により、上記「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」に関する事項を防犯教室に盛り込んで欲しいという要望があるかもしれません。

その場合は学校と十分に事前打合せをした上で対応をお願いします。

学校で実施される地域安全マップ作成について知っておこう

地域安全マップは基本的に学校主体で実施されますので、警察職員も学校から授業の依頼を受ければ、積極的にマップ作りに参加します。

学校は、「生活」、「総合的な学習」、「特別活動」などの時間にマップを作成、活用します。その中で、

- 通学路の安全について考える学習
- グループごとに地域の課題を考え、まとめ、発表する学習
- 事故等から身を守り安全に行動するための学習

などの内容の授業として実施します。

また、学校が地域安全マップ作成と併せて地域の歴史や自然環境を学ぶための活動を行う場合などもありますので、依頼を受けて授業に参加する際は、防犯・事故防止を主眼とした発言に終始しないよう十分に学校と打合せをして学校教育との整合性に注意するようにします。

また、子供たちとのつながりを深める目的でボランティアの方々が参加されることもあります。



出典：立命館大学歴史都市防災研究所ホームページ

参考：「地域安全マップ」は、立正大学小宮信夫教授が考案した名称です。

主題

危険回避・意思表示

声を掛けられたらどうするかを考える。

ねらい

歩いている時などに、誰かに声を掛けられた時の対応を知り、安全な行動をとれるようにする。

評価規準

思考・判断・実践

危険を予測し、安全な行動を考えている。

展開例

	学習活動(発問)	児童の反応 ※留意点	評価
<p>はじめ</p> <p> 3分</p>	<p>01. 下校中に、近所で顔を見るけど知らない人から「お家の人が事故に遭ったから一緒に来て。」などと声を掛けられたらどうしますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● すぐに逃げる。 ● すぐ逃げられるように距離を取って、一応話を聞く。 ● 「一度お母さんに聞いてからにします。」と言って断る。 <p>※ 「ついていく」と答える児童がいてもその発言を「お家の人が心配だね。」と認める。ついて行かないことを説明</p>	
<p>様々な場面で、危険を予測し安全を守るためにどうしたらよいだろう。</p>			
<p>なか</p> <p> 8分</p>	<p>02. お家の人が事故に遭っていないかどうやって確かめますか。</p> <p>03. こんな声掛けがあったらどう返事をしますか。「こんにちは。」はどうですか。「〇〇の場所を教えてください。」はどうですか。「今何時ですか。」はどうですか。グループで話をしてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● お家の人の携帯電話にかけて聞く。 ● 学校の先生に連絡して相談する。 ● 近くにいる大人や「こども110番のいえ」の人に言う。 ● 「こんにちは。」と挨拶する。 ● 「〇〇の場所」を指さして、教える。 ● 時間がわかれば教える <p>※ 道案内することはよいが移動を伴う案内はしないよう指導</p>	
<p>まとめ</p> <p> 4分</p>	<p>04. 悪い人は、いろいろな方法、やり方でみんなをだまそうとします。下校中、知らない人から声を掛けられたらどうしますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 挨拶をして少し離れて話を聞く。 ● 周りの大人に言う。 <p>※ 一律に知らない人やよく知らない人だから逃げるということではなく、「変だな」と感じたらすぐに周りの大人や「こども110番のいえ」の人に知らせよう指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 下校中など、危険を予測し、安全な行動を考えている。

主題

危険回避・意思表示

運動場や教室に部外者が来て
子供に声を掛けたときの対応
を考える。

ねらい

学校へ来訪する地域の方など部外
者に対して、適切に接したり、安
全に生活したりする行動を考える。

評価規準

思考・判断・実践

学校への来訪者のことを見て危険
を予測し、適切で安全な行動をと
る。

展開例

	学習活動(発問)	児童の反応 ※留意点	評価
はじめ 🕒 4分	01. 今日学校に地域の方など部外の方が来られたときの接し方を学習します。先生がいない運動場や校舎のろう下などで地域の方など部外の方から声を掛けられたときはどうしますか。	<ul style="list-style-type: none"> ● 「こんにちは。」と挨拶をして職員室に案内する。 ● 知っている人でも少し変だなと思ったときは走って職員室に行きます。 ● 知らない人だったら走って職員室に行きます。 など <p>※来訪する地域の方など部外者がすべて「不審者」というわけではないが少しでも変だなと感じたり、危険な物を持っていたりすることに気づいたらすぐに先生や周囲の友達に知らせよう指導</p>	
学校に来る地域の方などに適切に接しながら安全にも気をつけるにはどうすればよいだろう。			
なか 🕒 6分	02. 地域の方などが来られたら挨拶をしますね。でも少しでも変だなと感じたら逃げてください。人と話すときの距離を考えてみよう。人と話をするとき触れられない位の距離はどのくらいでしょうか。グループで話をしてください。	<ul style="list-style-type: none"> ● 1m位離れる。 ● 2m位離れていたらすぐ逃げられる。 など <p>※代表の子供2人に前に来てもらい「前へならえ」で子供同士の手がくっつかない程度に離れるよう指導、この距離は1.2m程度でこの位の距離なら相手が手を伸ばしても触れられないことを説明</p>	
まとめ 🕒 5分	03. 地域の方など学校に来る部外の方に挨拶をして適切な距離(1.2m)を取りながら案内することは大切ですが、少しでも変だなと思ったり、危険な物を持っていたりすることがわかったときはすぐに先生か周囲の友達に知らせてください。今日の感想を発表してください。	<ul style="list-style-type: none"> ● 「知らない人」だから逃げるばかりではいけないとわかった。 ● 学校に来る地域の方にきちんと挨拶をして案内をする。そのときにその人のことをよく見ておく。 など 	● 学校に来る地域の方などと適切に関わりながら、安全な行動も考える。

主題

危険回避・相談・報告

気になることがあれば、周囲の大人に相談する。

ねらい

危険から身を守り、自分や周囲の人の安全に気をつける。

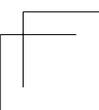
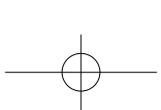
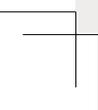
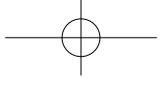
評価規準

思考・判断・実践

危険から身を守り、自分だけでなく周囲の人の安全にも気をつけることを考える。

展開例

	学習活動(発問)	児童の反応 ※留意点	評価
<p>はじめ</p> <p> 3分</p>	<p>01. 今までに通学路などを歩いていて危険な目に遭ったことはありますか。そんなときは誰に話をしますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 車に乗っている人から、声を掛けられたことがある。親に言う。 ● 怖い目に遭ったらその近くにいる人に言う。 ● 「こども110番のいえ」の人に言う。 <p>※「普段見ない大人が通学路に立っていた。」など通学路にある小さな変化なども犯罪の予兆である場合もある。いつもと違うことがあれば誰かに話をすることが大切であることを説明</p>	
<p>自分や友達が危険な目に遭ったと何故周りの人に言うことが大切か考えてみよう。</p>			
<p>なか</p> <p> 5分</p>	<p>02. 犯罪に関係するのではないかと感じるような普段と変わったことがあったり気になったりすることなど、お家の人のほか先生、地域の人や見守り隊の人に話をするようにします。またもし友達から犯罪ではないかとの相談を受けたり、友達などが犯罪に遭ったりするのを見たときはどうしますか。グループで話をしてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 友達から犯罪につながるかもしれない相談を受けたら、先生に言う。 ● その友達に先生か親に話をするように勧める。 <p>※もしも被害に遭っても被害に遭った人が悪いわけではなく悪いのは犯人です。自分を責めないようにしてください。被害に遭った友達がいたらそれを伝えるよう指導</p>	
<p>まとめ</p> <p> 2分</p>	<p>03. 今日は何か気になることがあれば、お家の人や先生など周りの大人に伝えることが大切と話しましたが子供だけで考えていても結論が出ないときも大人なら解決できることもある。普段から地域の人と話ができるようにするためにどのようなしたらいいでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の人や見守りの人に普段から挨拶をして顔見知りになる。 ● 通学路にある「こども110番のいえ」の場所やすぐに駆け込むことができるお店を知っておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 危険から身を守り、自分だけでなく友達や周囲の人の安全にも気をつけることを考える。



協力 大阪教育大学学校安全推進センター長 藤田 大輔
※敬称略
日本こどもの安全教育総合研究所理事長 宮田 美恵子
京都府教育庁指導部保健体育課 長谷川 法子
小島 英恵
京都市教育委員会事務局体育健康教育室 別井 真一
相原 祐

作成 京都府警察本部生活安全部少年課

デザイン協力 京都工芸繊維大学中野デザイン研究室

参考文献 特定非営利活動法人日本こどもの安全教育研究所理事長 宮田美恵子著
「うちの子、安全だいじょうぶ？ 新しい防犯教育」 株式会社 新読書社

2021(令和3)年3月